備後国分寺跡第１次発掘調査概報

１　９　７　３

広 島 県 教 育 委 員 会

備後国分寺跡第1次発掘調査概報

目　　次

Ⅰ　は　し　が　き …… (1)

Ⅱ　備後国分寺の位置・環境 …… (3)

Ⅲ　備後国分寺の歴史と既往の調査 …… (7)

Ⅳ　調　査　の　経　過 …… (9)

　　発掘調査日誌抄 …… (10)

Ⅴ　検　出　の　遺　構 …… (14)

Ⅵ　出　土　の　遺　物 …… (16)

　1．瓦　　類 …… (16)

　2．その他の遺物 …… (17)

Ⅶ　ま　　と　　め …… (20)

図　版　目　次

図 版 1　a．備後国分寺跡位置図
　　b．備後国分寺遠景
図 版 2　a．小山池廃寺（伝備後国分尼寺）遠景
　　b．同上近景
図 版 3　a．建物基壇東辺
　　b．建物基壇版築
図 版 4　a．建物基壇西辺（北西より）
　　b．建物基壇西辺（南より）
図 版 5　a．建物基壇南辺（南より）
　　b．建物基壇南辺（西より）

挿　図　目　次

第 1 図　寺跡付近地形図 …… (3)
第 2 図　第8区東壁断面図 …… (10)
第 3 図　建物跡平面図 …… (14)
第 4 図　建物基壇東辺断面図 …… (15)
第 5 図　建物基壇南辺実測図 …… (15)
第 6 図　軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦拓影実測図…… (17)
第 7 図　弥生式土器実測図 …… (18)
第 8 図　土師質土器実測図 …… (18)
第 9 図　石器実測図 …… (19)
第 10 図　鉄釘実測図 …… (19)

Ⅰ はじめに

今回、発掘調査を実施した備後国分寺跡は広島県深安郡神辺町大字下御領にある。

現地は、古代の山陽道の通過地であり、後述するように古くから交通の要衝としてひらけていた地域である。また付近は、昭和のはじめごろより畑の耕作中に多くの古瓦類や礎石が発見されることから寺院遺構の存在が推定されており、県教育委員会や町教育委員会でも２～３年前より発掘調査の実施について検討していたところである。

ところが、昭和47年８月、神辺町教委の藤井社会教育課長から、町が現国分寺の前面西側の墓地の拡張工事を計画しているとの連絡とともに、取り扱い方法についての照会があった。これをうけた県教委では、とり急ぎ工事計画の概要の報告を求めたところ、同年８月17日には町教育長より、工事に伴う寺跡の保存の協議書が提出されてきた。計画では地元住民の要求を考え、狭わいになった墓地を北側へ拡張するとともに、取り付け道路を整備するというものであった。

県教委では、遺跡の重要性と工事の必要性にかんがみ、８月28日に文化財保護室の室長補佐西本省三と河瀬を現地に派遣し、地元関係者と保存について協議を行なった。

この結果、寺跡の遺構は、未だ検出されていなかったが、遺跡包蔵の可能性を考慮するとともに、工事区域の土地買収がすでに終っていることもあり、緊急に発掘調査を行ない、遺構の有無を確かめる必要を認め、県教委が主体となり、文化庁の補助をえて、調査を実施する方向で検討することとした。

また、もし重要な遺構が検出されたときには、工事を中止し、代替地を求めてもらうことという了解をえておいた。

一方県教委では、昭和47年度に文化庁の補助をえて福山市で発掘調査を予定していた遺跡が、諸般の事由から調査の実施が困難になったので、この調査費を国分寺跡の調査にあてることについて文化庁と協議を重ねたところ、文化庁の承認がえられたので、昭和47年12月４日から昭和48年１月13日までの24日間にわたっ

て発掘を実施した。調査費は、国庫補助金 50万円、県負担金 50万円の計 100万円をあてることにし、調査には、つぎのものがあたった。

村上正名	広島県文化財専門委員	広島大学付属福山高校教官
潮見　浩	広島県文化財専門委員	広島大学文学部助教授
川越哲志	広島大学文学部教官	
河瀬正利	広島県教育委員会文化財保護主事	
鹿見啓太郎	〃	指導主事
桧垣栄次	〃	指導主事

この外、調査にあたっては、神辺町、神辺町教育委員会、また、国分寺住職横山宗司氏夫妻、向田裕始氏（立正大学学生）、および土地所有者の友道マミエ、丁田宣彦、徳永寿子の各氏など地元の方々の多大の協力をえた。ここに厚くお礼申し上げる。

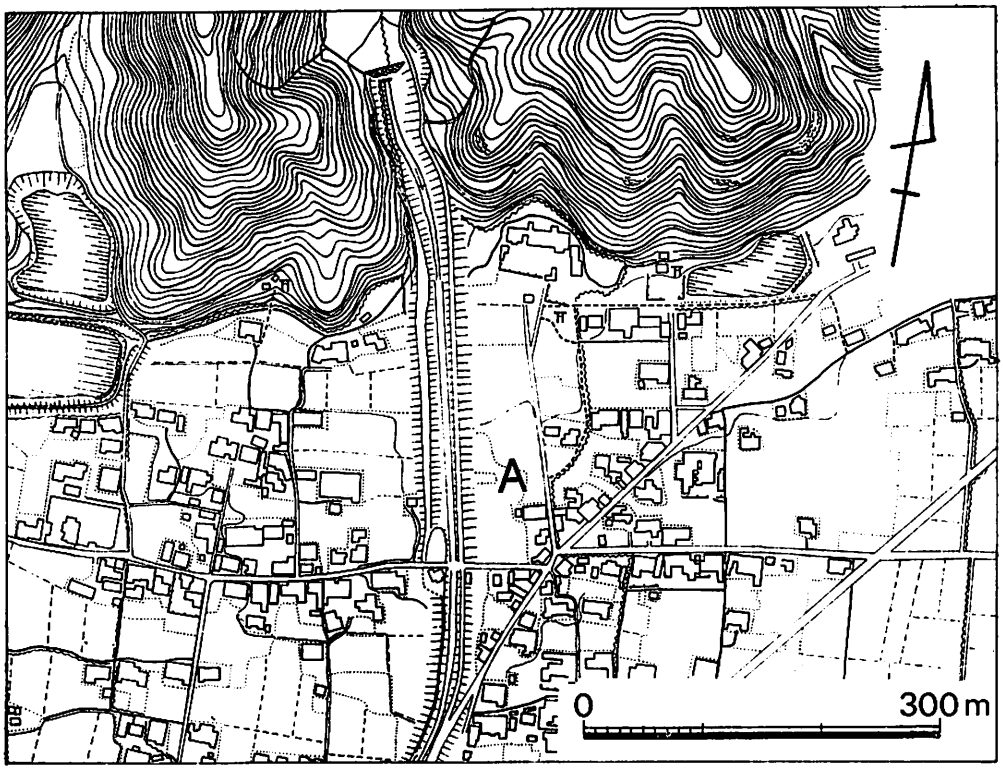
調査の結果、工事予定区域から、東西約30m、南北約20mの建物跡が発見されたので、神辺町の熊谷町長に保存を要望するとともに現地説明会を行なって地元の方々の理解を求めた。これにより、町は寺跡の保存についていっそう積極的な姿勢をしめされることとなったのである。　（河瀬　正利）

Ⅱ　備後国分寺の位置・環境

備後国分寺跡は、広島県深安郡神辺町大字下御領字高渕町1430～1437番地に存在する。

神辺町は、広島県東部最大の都市福山市の北部約10㎞の付近に位置し、近時福山市との合併が検討されるなど、衛星都市的性格をおびできている。このため、宅地造成工事や区画整理事業などの開発事業により、周囲の丘陵や水田の開発が急速に進んでいる地域である。

備後国分寺跡は、古くより、「吉備穴の海」と呼ばれている神辺平野の東北縁部に位置し、背後には、標高100m～200m前後の丘陵が連っており、その丘陵の南側の山麓部に存在する。前面には、芦田川の支流の高屋川がほぼ東西に流れ、この川により形成された細長い沖積平野が、岡山県の井原市・高屋町の方向から



第1図　寺跡付近地形図（Aは本年度調査地域）

続いている。

古代の山陽道も、岡山県井原市・高屋町からこの備後国分寺の南側を通り、西方の小山池付近を経由して駅家町・府中市へと続いていたといわれており、古くより備後国の玄関口として政治的にも文化的にも進んでいた地域と考えられる。

この神辺平野周辺の遺跡・遺物について概観すると、遺跡のほとんどは平野をめぐる低丘陵の斜面上と山麓部に存在しており、その多くは、弥生時代後半から古墳時代にかけてのものである。①

今のところ縄文時代の遺跡は、きわめて少なく、神辺平野西北方の県史跡指定の宮脇遺跡（新市町常）が縄文時代早期の遺跡として著名である。この外では、縄文時代晩期の土器を包含する神谷川遺跡（新市町神谷川）や神辺町上御領丹花の土器包含地がしられているのみであり、この時代の様相については不明な点が多い。

弥生時代に入ると、遺跡は、平野全域にわたって増加する傾向にあることから、このころからかなり人々が、付近に住みはじめたようである。

この時代の遺跡は、平野の低丘陵上および芦田川とその支流が形成した沖積地の中に立地するようになる。代表的な遺跡としては、県史跡指定の亀山遺跡（神辺町道上）がある。遺跡は、神辺平野のほぼ中央に位置する標高約40m、付近の水田からの比高が約20mの独立丘陵上に立地し、遺物は、東・南部の傾斜面から発見されており表土下の包含層から弥生時代前期から中期にかけての土器と多くの石器が出土している。土器では、前期の突帯文や沈線文を有する土器や中期の櫛目文をもつ土器が層序をなりして存在しており、石器は、多数の石鏃と石包丁・石斧など多様のものがあり、広島県東部の代表的な遺跡である。②この外、国分寺付近の弥生時代遺跡としては、御領遺跡（神辺町下御領）、国分寺裏山遺跡（同）、古屋敷遺跡（同古屋敷）などをあげることができる。

古墳時代に入ると平野の周辺の低丘陵上に多くの古墳が築造されるようになる。

国分寺付近でみれば、箱式石棺を内部主体とする古墳の多い下竹田の辺木山古墳群（14基）、江草山古墳群（10基）、国分寺裏山古墳群（4基）や横穴式石室を主体とするものの多い下御領古墳群（39基）、上御領古墳群（22基）、湯田の迫山

古墳群（14基）など群集墳を形成しているものが多く、古墳の密集地帯となっている。このことは、つぎの歴史時代の遺跡を生む素地となっているともいえる。

歴史時代の神辺平野の特色は、寺院に関係する遺跡が多く存在していることであろう。

しかし、これらの遺跡の性格については、調査が進んでいないためあきらかでないところが多いが、白鳳時代と考えられるものは伝吉田寺跡（府中市元町）[8]、栗柄廃寺（府中市栗柄町）、宮の前廃寺（福山市蔵王町）[4]の3寺跡で、他は備後国分寺跡、小山池廃寺（神辺町湯野）、内砂子廃寺（同上竹田）、塔谷廃寺（同下竹田）、廃最明寺跡（芦品郡駅家町）、廃慶徳寺跡（芦品郡新市町）など天平期に比定されるものである。

備後国分寺跡は、高屋川の形成した沖積地の北縁の丘陵山麓部に立地し、備中国から備後国へ入る玄関口にあたっている。現在では北側は、標高100～200mの丘陵を背負い、南側は、備中の後月（しつき）駅から備後の安那（やすな）駅（神辺町湯野？）品治（ほんじ）駅（芦品郡駅家町）、葦田（あしだ）駅（府中市？）へ続くといわれる古代山陽道が走り南の境界となしていると考えられる。西側は、後述するように大原池決壊後、改修された天井川の「堂々川」が南に流れており、この川の押し流す土砂のため現国分寺の前面一帯は、厚い砂の堆積があり、このため四至の確認を困難にしている点が多い。

小山池廃寺は、国分寺の西方約 600mのところに位置している。現在は、かんがい用および養魚用の小山池として使用されているが池の周辺から蓮華文軒丸瓦や唐草文軒平瓦などの古瓦類が発見され、また池の底には、礎石があるといわれることから寺跡と推定されるにいたったものである。この遺跡の性格については、備後国分寺と近接し、しかも古瓦類が国分寺出土のものに類似することから今のところ国分寺尼寺跡の可能性が大きい。[5] しかし、未だ不明確な点が多いので今後の調査検討が必要とされるものである。

この寺跡の西方には中谷廃寺（神辺町道上）、法成寺廃寺（駅家町西組）と続き、一方瀬戸内沿岸の福山市大門町から神辺町御領に続く道路沿いには内砂子廃寺、塔谷廃寺、川谷遺跡（神辺町上竹田）など天平期の寺跡や古瓦出土地が存在しており、交通の要衝として国分寺付近は、古くよりひらけていた地域と考えら

れる。

また、国分寺西方の湯野を中心とする地域は、「中条」、「方八町」などの地名の存在することから条里遺構を残していると推定されている。⑥

この外、歴史時代の遺跡としては、南北朝時代に備後国守護職を与えられた朝山氏が築城した神辺城跡（神辺町川南）⑦や要害山城跡（神辺町湯野）などの山城や江戸時代の参勤交代のための神辺本陣跡などの遺跡があり、神辺はながく備後国の政治的中心地であったことを知ることができる。　　（河瀬　正利）

注 ① イ．広島県教育委員会『広島県埋蔵文化財包蔵地地名表』（1961）
ロ．文化財保護委員会『全国遺跡地図（広島県）』（1967）
② 潮見　浩「広島県亀山遺跡発掘調査報告」（広島大学文学部紀要　第21号、1962）
③ 広島県教育委員会『伝吉田寺跡発掘調査概報』（1968）
④ 広島県教育委員会『備後工業整備特別地域内埋蔵文化財調査概報』（1967）
⑤ イ．村上　正名『備後国分寺』（神辺町文化財シリーズ　No.2、1966）
ロ．注④に同じ
⑥ 松岡　久人「備後国の条里制とその文献」（『福山市史』上巻　1963）
⑦ 村上　正名『神辺城』（神辺町文化財シリーズ　No.3　1967）

Ⅲ　備後国分寺の歴史と既往の調査

国分寺の建立については、奈良時代の天平13年（741）の聖武天皇の造立の詔により、全国60余か国に国分寺僧寺と尼寺とを建立したことにはじまるといわれている。

広島県の安芸国・備後国の国分寺については、『続日本紀』によれば、天平勝宝8年（756）には存在したとされているが両国の国分寺の位置や伽藍配置については、今まで不明な点が多かった。

安芸国分寺については、昭和7年（1932）の発掘調査による塔跡の発見後、広島県賀茂郡西条町大字吉行に存在していたことが確認され、また、昭和44年までの県教育委員会の発掘調査により寺域や伽藍の一部があきらかにされてきた。①

しかし、備後国分寺については、その位置や伽藍は、今まで何一つあきらかにされていなかった。これは、現国分寺所蔵の『国分寺来田記』によれば現国分寺の北方約2㎞のところにある大原池が延宝元年(1673)5月の豪雨のため堤防が決壊し、多量の土砂を南側の国分寺方向へ押し流し、一瞬のうちに国分寺の堂塔を埋没させてしまったためと考えられている。また、それ以前の戦国時代の天文年間には、備後国の守護山名氏と周防から安芸にかけて支配していた大内氏との間の兵乱のため焼失してしまうなど度重なる被害をこうむっているからでもある。

その後は、永禄元年（1558）に神辺城主となった杉原盛重の雍護のもと再建がはじまり元禄年間には領主の水野氏が寺の西側に堂々川の改修整備を行ない現在の国分寺付近の地形的様相を形づくっていった。

この、備後国分寺跡についてはじめて研究を進めていったのは、現国分寺の先住職の方と旧御野村長で郷土史に関心をもっていた土肥七郎氏である。両氏は、昭和のはじめごろから付近の畑の耕作中に出土する古瓦類や礎石に注目し、それらの出土地点を地図に記載していくとともに、付近一帯の寺に関係する字名を調査し伽藍配置の推定を行なった。その結果、伽藍の中軸線を現国分寺参道東側付近に想定し、南端を古代山陽道の南約50mの地点に求めている。

その後は、村上正名氏が、神辺平野周辺の寺院跡と古瓦出土地との比較研究から国分寺を位置づけようと試みており[②]、また、昭和42年には備後工業整備特別地域内の埋蔵文化財を調査した県教委の調査団（担当潮見浩氏）が、国分寺跡出土瓦と小山池廃寺出土瓦の整理分類を行なうなど[③]、しだいに備後国分寺に関する調査を進めていたところである。

しかし、最近になり、福山市の衛星都市的性格をもつ、この地域への開発の波は急テンポで進んでくることとなり、寺跡の保存について恒久的対策を講ずることが必要となってきたのである。　（河瀬　正利）

注　①　広島県教育委員会『安芸国分寺跡　1、2、3』（1970～72）
　　②　村上　正名『備後国分寺』（神辺町文化財シリーズ№2　1966）
　　③　広島県教育委員会『備後工業整備特別地域内埋蔵文化財調査概報』（1967）

Ⅳ 調査の経過

発掘にあたっては、既往の調査を参考にし現国分寺参道付近に伽藍の中軸線を想定した。また寺域南辺は、旧山陽道に推定し、東西約200m、南北約200m前後の寺域を想定した。

ただし、今年度は、調査費が限定されたのでとりあえず、工事計画のある参道西側の桃畑を中心に調査区を設定することにしたが、遺構の検出状況にしたがって適宜拡張していく方針をとった。

まず参道入口の北約60mのところから西へ第1トレンチ（14×3m）を設定した。厚さ約40cmの暗かっ色砂層（耕土）の下に厚さ約20mの黄色砂層が堆積しており、その下は青灰色粘土質土層（旧地表）と続いていた。

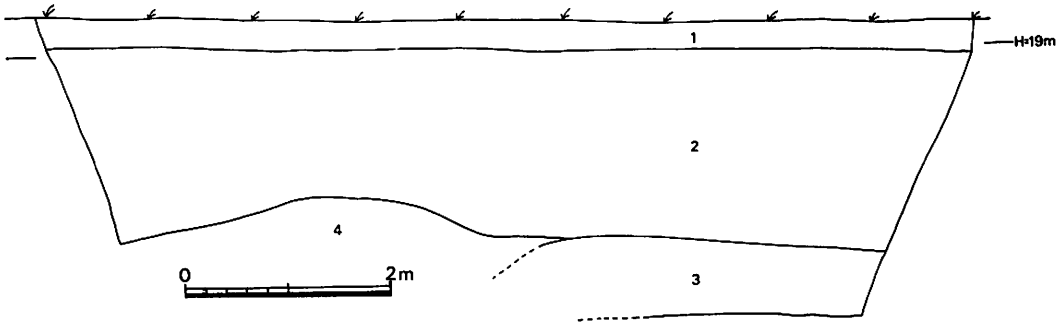
この下から6層からなる高さ50cmの基壇が検出された。つぎに寺域の北辺検出のため、現国分寺仁王門の南西の畑へ第2トレンチ（10×3m）を設けた。表土の下には、黄色の砂層が約2.5mも堆積しており、その下は、上手から流出してきたものとみられる大岩石がびっしりつまっていた。

第1トレンチ検出の基壇の続きをみるため西側の竹籔の中へ第3トレンチ（13×3m）を設定した。西よりは後世の攪乱のため基壇土が相当深く掘り込まれているところがあった。

つぎに基壇西辺をみるため第3トレンチの西へ約2m、北へ4mのところから堂々川の堤防下まで第4トレンチ（18×3m）を設けた。後世の桃の植え込み穴のため基壇端のはっきりしないところがあったがトレンチ東端より約4mで基壇土が西へ傾斜しているところがあり西辺と推定された。この結果、基壇の東西規模は約30mであることが確認された。

つぎに、この基壇の南・北をあきらかにするため第1トレンチ南側の畑へ第5トレンチ（11×3m）、第1トレンチの北約7mのところへ第6トレンチ（8×2m）を設定した。

第5トレンチでは、表土の下に砂層が堆積し、その下から基壇が検出された。



第2図 第8区東壁断面図（1. 耕土、2. 黄色砂層、3. 青色粘質土、4. 円礫層）

トレンチの北より約2.5mで基壇が南へ傾斜しており南辺と推定された。

第6トレンチでは、砂層の下から青灰色の粘質土があらわれたが基壇は相当削平されており最下部しか残存していなかった。トレンチ南端より約5mのところから北はこの基壇最下層が続いておらず北辺と推定された。以上の結果、東西が30m、南北が20m前後の基壇規模をもつ建物跡であることがあきらかになった。

また、第6トレンチの東側へ、基壇の東北隅検出のため第7トレンチa（5×5m）とb（1.5×1m）を設定した。しかし、大きなカキの木があったためと後世の削平が著しいためコーナーを検出することはできなかった。

また、寺域北辺追求のため、第2トレンチの北へ第8トレンチ（9×4m）を設定したが、厚さ約 2.5mの砂層の下は、岩石群と青色粘質土となっており遺物もなく遺構の存在は認められなかった。

なお、建物基壇の下層は弥生式土器・石器の包含層となっている。

（河瀬　正利）

発掘調査日誌抄

1972年（昭和47）

12月4日　月曜日　　晴

午後神辺町の国分寺へ着き、調査の準備を行なう。そののち、町教委で鍬入式、調査日程の協議をする。

12月5日　火曜日　　晴

鍬入式ののち、調査予定地内の竹、木の伐採を行ない。参道西側へ第1トレンチを設定す

る。砂層の下には、暗かっ色粘質土が続いており、中から平瓦片が出土しはじめた。

12月 6 日　水曜日　　晴ときどき曇

第１トレンチ―トレンチ東端より約６ｍで検出された上面の平たい石の周囲を調査する。

礎石かどうかはっきりしない。つぎに現国分寺仁王門の前に第２トレンチを設定する。

厚い砂層が堆積している。地表より２ｍのところから下には大きい岩石がびっしりとつまっており深さ 2.5ｍのところまで続いている。

12月 7 日　木曜日　　曇ときどき晴

第２トレンチ―地表下約 2.5ｍまで砂層と大円礫がつまっており、遺構の有無を確認できない。遺物は全く出土しない。

第１トレンチ―先日発見された石の周囲を調査する。掘り方らしい穴があるが、中から川砂とともに後世の五輪塔の水輪部が出土する。礎石の掘り方としては疑問な点が多い。

12月 8 日　金曜日　　晴

第１トレンチ―トレンチ北よりを深く掘り下げてみる。砂層の下から、粘質土とマサ土が交互に積み重なっているのがみられ、版築土と推定された。この土は、トレンチ東端より約３ｍのところから東へ傾斜しており基壇東辺と推定された。

第２トレンチ―断面図を作成する。

12月 9 日　土曜日　　晴

第１トレンチの西へ第３トレンチを設定する。第３トレンチ砂層の下から円形や方形状のピットが検出された。断面をみると表土層から掘り込んでおり後世の撹乱のための掘り込みとみられた。第１トレンチから続く基壇は、第３トレンチ西端よりまだ西へ続いているものと考えられた。

12月11日　月曜日　　晴

第３トレンチの西北方へ第４トレンチを設定する。第４トレンチ東端近くで礎石らしき石があらわれたが、第１・第３トレンチで検出された基壇はみつからない。

12月12日　火曜日　　雨のち曇　～　12月13日　水曜日　　曇

第４トレンチ―礎石らしき石は、表土層から掘り込まれており、後世に埋め込まれたものらしい。このためトレンチ北側の基壇を破壊している。

12月14日　木曜日　晴ときどき曇

第１・第３トレンチ―トレンチ北よりを巾50cmほど掘り下げる。基壇の下は弥生式土器の包

含層となっている。

12月15日　金曜日　　晴ときどき曇

第４トレンチ―排土を続ける。

12月16日　土曜日　　晴ときどき曇

第４トレンチを南へ拡張する。砂層の下から第３トレンチでみられた基壇土最下層の黒かっ色マサ土があらわれ、この土層がトレンチ東端より約４ｍのところで西側へ傾斜していることがわかった。基壇西辺と推定された。

この付近では基壇は相当削平されているようである。

12月18日　月曜日　　曇ときどき晴

第４トレンチ―基壇の西辺を確認する。第１トレンチ南側へ第５トレンチを設定する。砂層中より、土器類・瓦が多量に出土した。トレンチ北より約３ｍで、基壇が南へ傾斜しており。南辺と考えられた。

12月19日　火曜日　　曇ときどき晴

第１・第３・第４トレンチ―写真撮影を行なう。

第５トレンチ―基壇南辺の南側からは相当数の瓦が出土する。

12月20日　水曜日　　晴

基壇北辺をみるため第１トレンチの北側へ第６トレンチを設ける。トレンチ南端より約６ｍで基壇土最下層が北へ傾斜しており、基壇北辺と推定された。

第１・第３・第５トレンチ―遺構および断面の実測と平板測量を行なう。

瓦の洗浄をはじめる。

12月21日　木曜日　　晴後曇

第４・第６トレンチ―基壇の実測を行なう。第５トレンチ―埋め戻しをはじめる。

12月22日　金曜日　　晴

基壇東北隅の確認のため第７トレンチを設け発掘する。隅に当ると思われる部分は、柿の木の根によって破壊されており、確認できない。

第４トレンチ―平板測量を行なう。

12月23日　土曜日　　雨後曇

全てのトレンチについて検出した遺構を傷つけないよう川砂をかけ埋め戻しをはじめる。午後、地元民の理解をえるため現地説明会を行なう。終了後、今後の寺跡保存の対策について、

神辺町および町教委と協議する。

1973年

1月8日　月曜日　　晴

第2トレンチの北側へ第8トレンチを設ける。第2トレンチと同様、砂層が厚く堆積している。

1月9日　火曜日　　晴時々曇

第8トレンチ―第2トレンチと同じく砂層の下より大円礫が多量にあらわれ、発掘が困難となる。南側では地表下約 2.5m で、黒かっ色粘質土層が見られたが遺物もなく、遺構は検出されなかった。

1月10日　水曜日　　時々曇

第8トレンチ―黒かっ色粘質土層を掘り下げる。弥生式土器片が少数出土した。遺構は存在しないようである。

1月11日　木曜日　　晴

第7トレンチ―基壇確認のため排土を行なうが後世の撹乱のため基壇の残存はよくなく、基壇版築土の最下層を確認するのみである。

調査区付近の 1/100 地形図を作成する。

1月12日　金曜日　　晴　～　1月13日　土曜日　　晴

全トレンチの埋め戻しを完了し今年度の調査を終了する。

（桧垣　栄次）

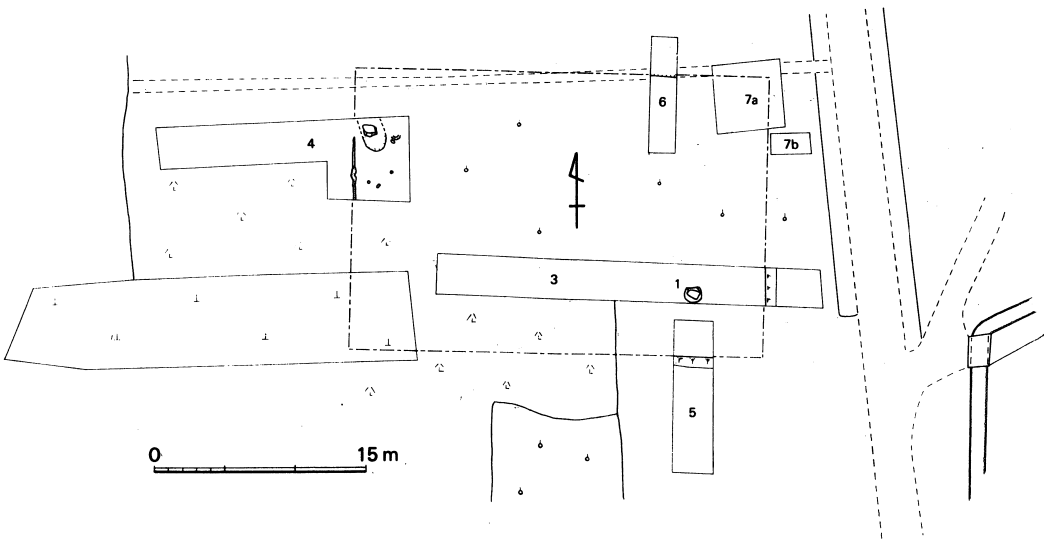
V 検出の遺構

今年度の調査で検出した1棟の建物は、その性格をあきらかにしがたいので、とりあえず建物基壇と称することにした。この建物の性格や他の遺構および寺域などについては、今後の調査によりあきらかにしていきたい。

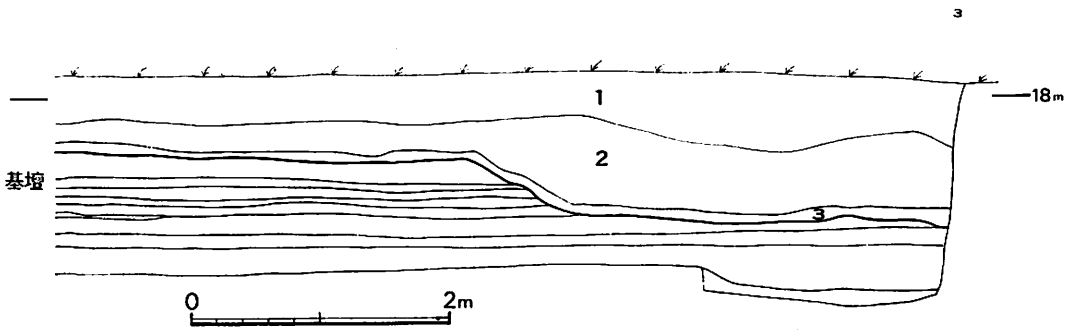
建物基壇跡

現国分寺参道西側に設けた第1・第3・第4・第5・第6トレンチから検出された。基壇の東辺は、第1トレンチ東より約3mのところで基壇土が東へ傾斜していることからあきらかになった。この基壇東辺より約5mのところに径1.2mの掘り込み穴があり、中から上面の平坦な石が発見され礎石とも推定されたが、穴の中から砂とともに五輪塔の水輪部が出土しており礎石の掘り方かどうかは、はっきりしなかった。

基壇西辺は、第4トレンチから検出された。この付近は、桃の植え込みの際の掘り込み穴が各所にあり基壇の検出も困難であったがトレンチ東端より約4mで基壇最下層の黒色土層が西へ傾斜しており、さらにこの部分だけ瓦の破片が南北



第3図 建物跡平面図（番号はトレンチ番号）



第4図　建物基壇東辺断面図（1．表土層　2．黄色砂層　3．青灰色粘質土）

方向に続いて発見されたので西辺と推定された。

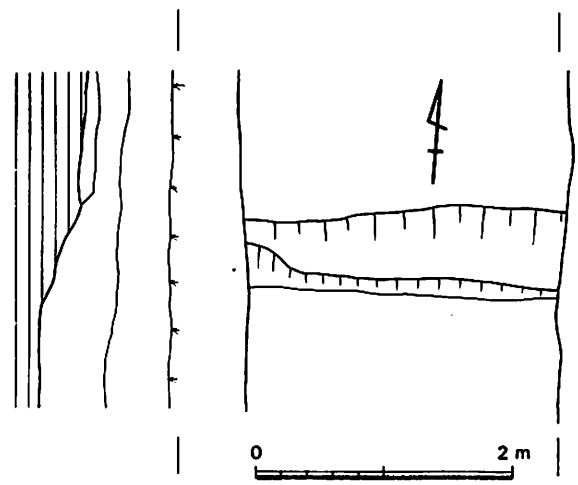
つぎに基壇南辺は、第5トレンチの北端より約 2.5m南のところから基壇土が南へ傾斜しており、これより南側でかなりの瓦類が発見されたのであきらかになった。砂層の下の基壇は現高40cmで、残存状態も良好である。

北辺は、後世の攪乱のため基壇部の削平が著しいが基壇土最下層の黒色マサ土が第6トレンチ南より約5mのところから北でなくなっていることからあきらかにされた。現在高約10cm以下であり、残存の状態はよくない。

以上の結果、この建物基壇は東西が約30m（100尺）、南北が約20m（65尺）前後の規模をもつものと推定された。

基壇は元来50cm前後の高さを有していたと推定されるが、石などは使用されていないようである。

本基壇の建物の性格を考えると東西30m、南北20m前後の基壇規模をもつことから、他の国分寺の建物基壇の大きさとも比較して金堂跡ないしは講堂跡と推定されるがほかの建物遺構があきらかにされていない現在どちらとの断定はできない。今後の調査にまちたい。　　（河瀬　正利）



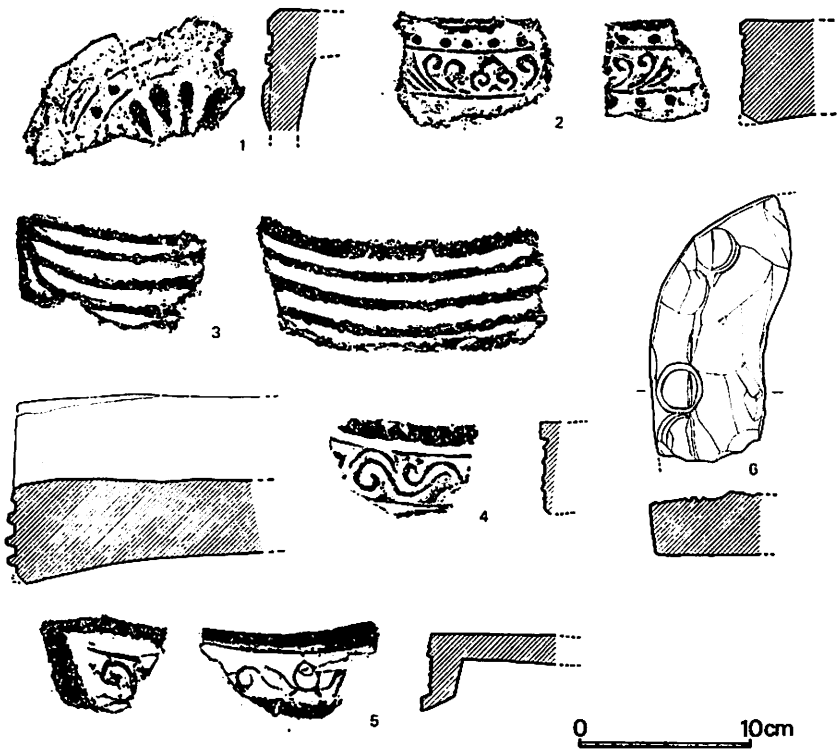
第5図　建物基壇南辺実測図

Ⅵ 出土の遺物

1 瓦　　類

今回の調査では、軒丸瓦、軒平瓦をはじめ丸瓦、平瓦、鬼瓦など南方建物が検出された調査区より多数出土した。ここではとりあえず軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦について紹介しておく。なお丸瓦は玉縁のついたものばかりであった。

1は瓦当面が3分の1ほどの破片であるので詳細は不明だが、復元径17cmの単弁蓮華文軒丸瓦である。中房は欠落して不明だが、現国分寺所蔵の同范と思われる軒丸瓦からの推定では1＋4の蓮子を持ち、18葉のやや隆起した単弁からなりたつもので、外区は2条の圏線の間に珠文帯を廻らす無文の外縁である。色調は茶かっ色と黒かっ色を呈するもの2片が出土している。焼成は両方とも良好である。軒丸瓦ではこの他に巴文軒丸瓦が出土している。



第6図　軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦拓影実測図

2は均正唐草文軒平瓦である。中心飾は𝒷でそれより左右に3転する唐草を派生させてあり、上下外区に珠文帯を廻らしている。厚さ 6.0㎝でやや厚目であるが、色調は黒かっ色を呈し、焼成が不良で弱い感じである。2個破片が出土している。

3は重弧文軒平瓦で、彫りの深い5本の弧線よりなりたち、黒味を帯びた焼成の堅い軒平瓦である。中心部での厚さ 6.0㎝ほどで破片が8個出土している。

4は、均正か扁行するのか不明だが唐草文軒平瓦である。2転する唐草文が伺われるのみで、やや灰色がかり、もろい感じである。1片出土している。

5は均正唐草文軒丸瓦である。焼成は堅く、色調も青灰色であるが、唐草文様は退化しており、厚さは 4.5㎝、顎は浅く下方にとがっている。かなり時代が下るものと思われる。3個破片が出土している。

6は鬼瓦片である。外縁に径 2.2㎝の竹管で刺突したような珠点3個が残存しているが、顔面部分は剝離して不明である。厚さは 3.5㎝で、焼成は弱く灰色がかっている。鬼瓦の左肩部に相当するものと思われる。

（鹿　見　啓太郎）

2　その他の遺物

今回の調査において、土器・石器・鉄製品・須恵器・陶器などが出土したが、須恵器・陶器などは、小片のため器形があきらかにできなかった。

弥 生 式 土 器

建物基壇土下の包含層より出土した。すべて磨滅の著しいものである。

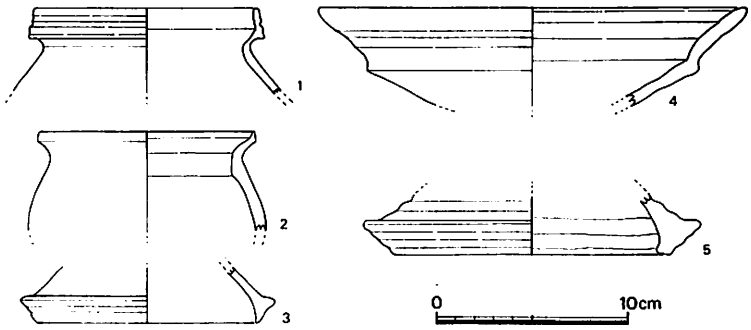
1は、口径11.4㎝の甕で、胴部がはっている。口縁部に凹線が2本見られ、わずかに内傾している。かっ色を呈し、焼きは弱い。

2は、口径11.2㎝のくの字状の口縁をもつ甕で、胴部ははっていない。赤かっ色を呈している。

3は、脚径11.2㎝の高坏の脚部で、凹線が2本見られる。赤かっ色を呈し、焼成はよくない。

4は、口径22.4㎝の高坏の坏部、口縁下4.2㎝のところに突出があり、口縁部はわずかに外反している。内面のところどころにへら調整の痕が見られ器壁も厚い。

5は、脚径14cmの高坏脚部で、凹線が3本見られる。赤かっ色を呈し、焼成は不良である。いづれも弥生後期に比定できる。

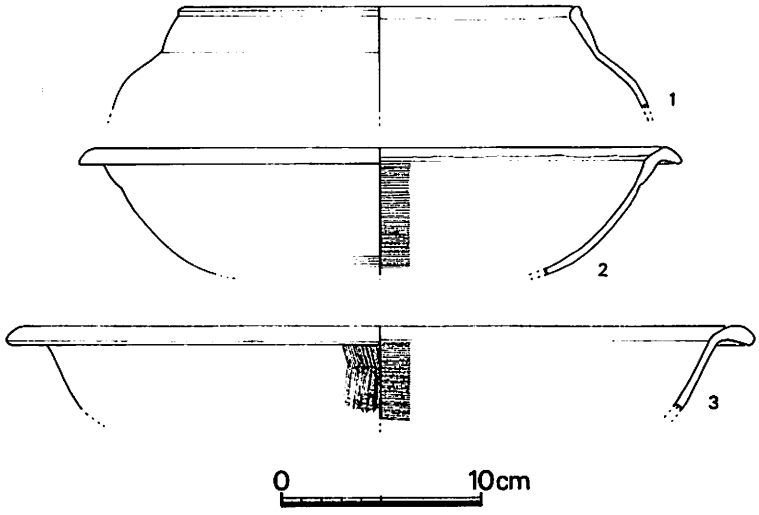


第7図　弥生式土器実測図

土師質土器

遺構面上のかっ色土層・砂層から出土した。1は、口径20cmの甕で、口縁部は内傾している。黒灰色を呈し、内面は指圧のためか凹凸がある。内外面とも表面が剝落している。2は、口径28.6cmの土鍋で、口縁部に鍔をつけた痕があり、大きく反り曲がっている。内面には横にへら調整の痕がある。外面にはススが付着しており、口縁部より約5cmの部分までは指圧痕が、それより下部はクシ調整の痕がみられる。3は、口径37.4cmの土鍋で、口縁部は大きく反り曲がっている。内面は横に、外面は縦にはけ目がみられる。外面にはススが付着している。

いずれも室町時代ごろに比定できよう。

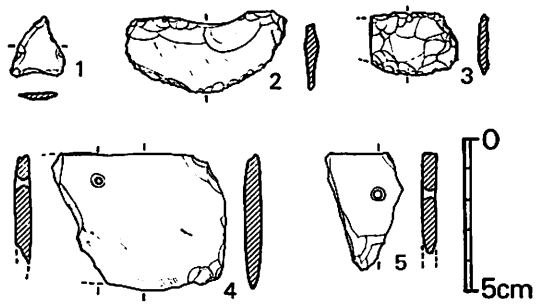


第8図　土師質土器実測図

石　　器

すべて基壇土上層の堆積砂層中より出土した。

1は石鏃で、片面加工の粗製品である。安山岩製。2はスクレーパーで、横長剝片の凸部に両面調整を加えている。安山岩製。3も、スクレーパーで、横長剝片に全面に調整が加えられ片側が打損している。安山岩製。4は、磨製の石包丁で、幅4.4cm、厚さ0.5cm、刃は両面から磨いたもので、孔は1つしか残っていないが、両側から穿孔している。5は、磨製の石包丁で、孔の部分しか残っていない。両側から穿孔している。

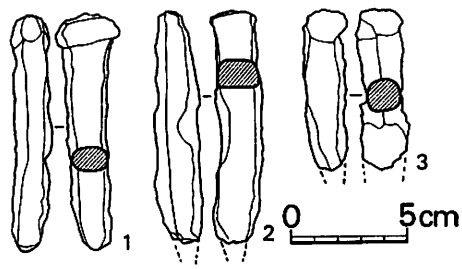


第9図　石器実測図

鉄　製　品

遺構面上から出土している。3本とも瓦どめの釘らしい。断面は、ほぼ方形である。

1は、現長10cm、先端部は不明。2は、現長10cm、頭部・先端部は欠失している。3は、現長6.9cm、下半部は欠失している。　　（桧垣　栄次）



第10図　鉄釘実測図

Ⅶ まとめ

今年度の調査は、調査費が限られたため墓地の拡張工事が計画されていた現国分寺参道の西側を中心にして約 300㎡の部分的なトレンチ調査を実施するのにとどまった。

調査にあたっては、既往の調査を参考にして現参道東側付近を伽藍中軸線と仮定し東西約200m、南北約200mの寺域を想定して発掘計画を立てた。

その結果は、建物基壇跡1棟を検出することができ、その検出した基壇の規模は、東西30m、南北20m前後と推定された。

国分寺の伽藍で、この程度の規模をもつものとして考えられるのは金堂跡、ないしは講堂跡であるが、部分的な調査のため他の遺構の探索ができなかったのでいづれかをあきらかにすることは来年度以降のより大規模な調査によりたい。

出土遺物の瓦類については、既出の瓦類と同じ型式のものだけであり、新しい資料の発見はなかった。今後は、神辺平野周辺の他の寺院跡出土の瓦類との比較研究が必要となろう。

国分寺の四至についても、築地などの遺構検出ができなかったため、あきらかにしがたいが、地形的にみて現国分寺の永禄年間の再建時には背後の裏山の山麓部を相当削平して建立されたことがしられており、また仁王門前に設定したトレンチからも築地などの遺構が検出されなかったことからみて伽藍の北縁は、当初の想定よりかなり南へ寄っており、第2トレンチ以南に限られるようである。

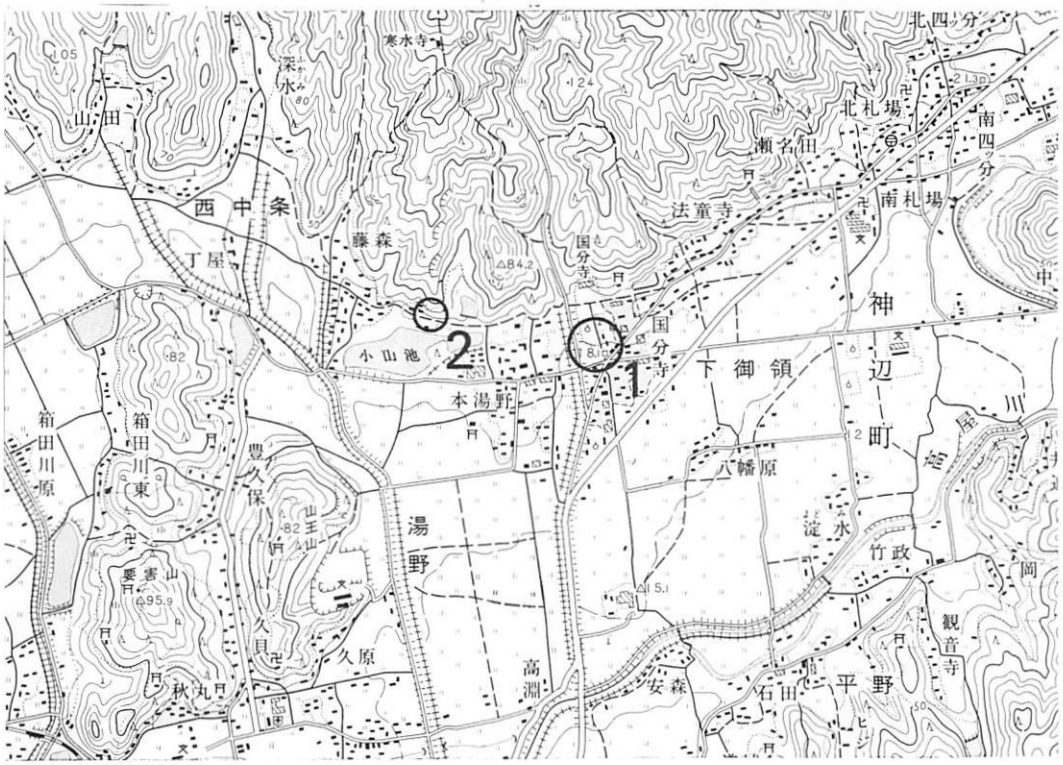
寺域南辺については、すぐ南に接して古代の山陽道が東西に走っており、この道路を南辺と想定すれば、伽藍の南北は約 150m前後と考えることができる。しかし、いづれにしても伽藍規模、配置については、今後の調査をまちたい。

今回検出の遺構付近は、神辺町が墓地の拡張を計画されていた地域であったが、遺構検出により寺跡の保存について積極的に検討されることになった。

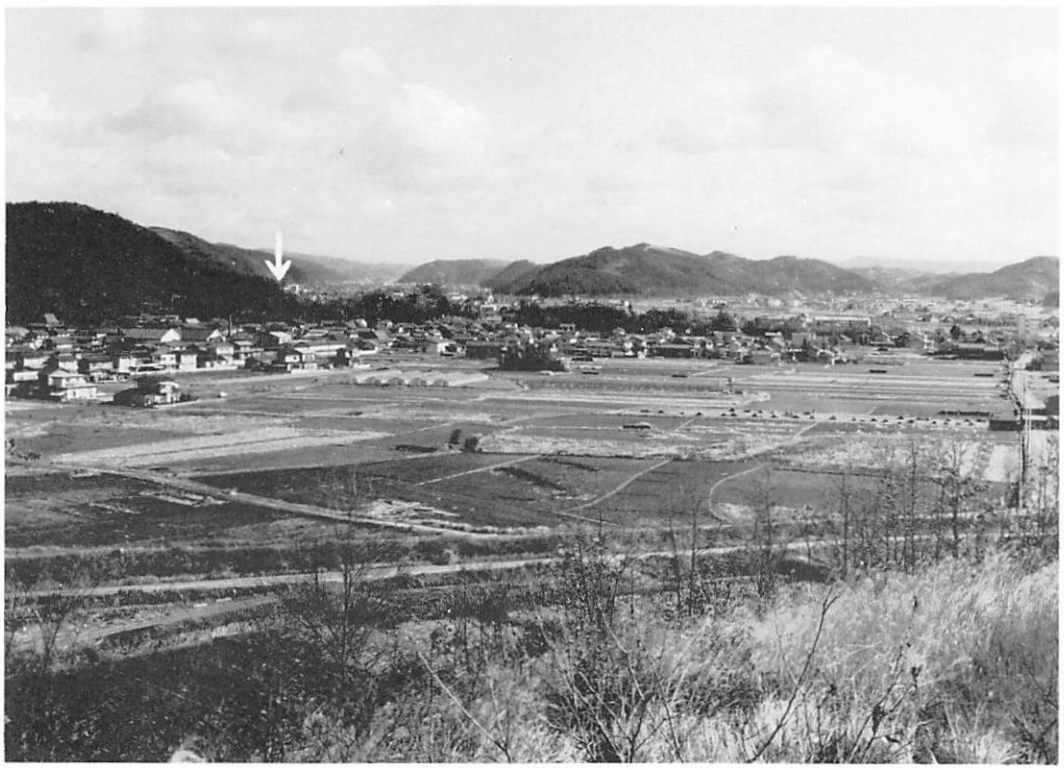
最後に、神辺町や、地元の方々の文化財保存への深い理解に対し、調査開係者として感謝の意を表したい。

（河瀬　正利）

図　　版



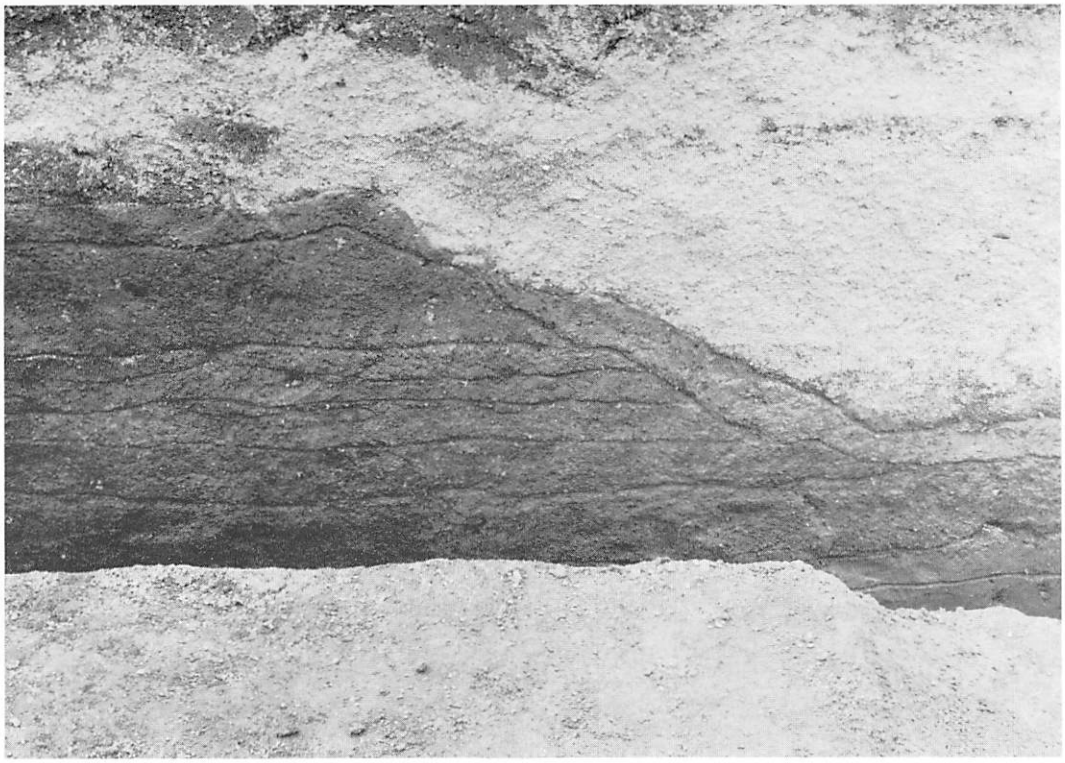
a. 備後国分寺跡位置図(1.備後国分寺跡 2.小山池廃寺跡)
〔1：25,000　神辺〕



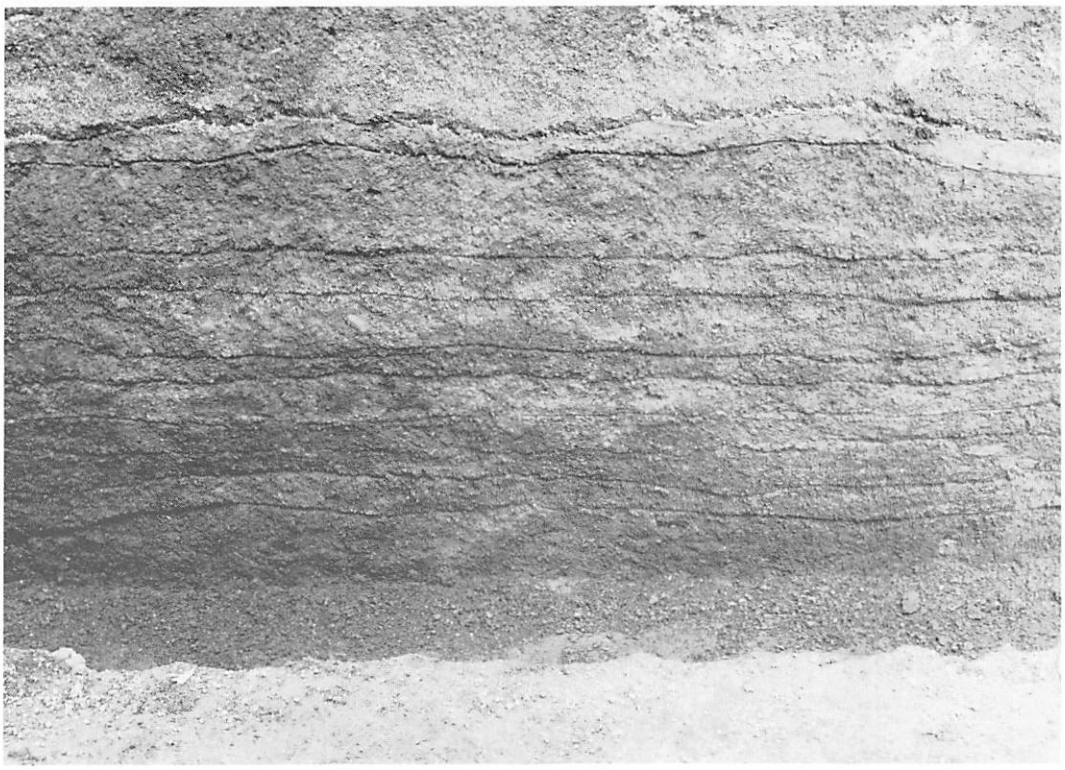
b. 備後国分寺遠景

a. 小山池廃寺(伝備後国分尼寺)遠景

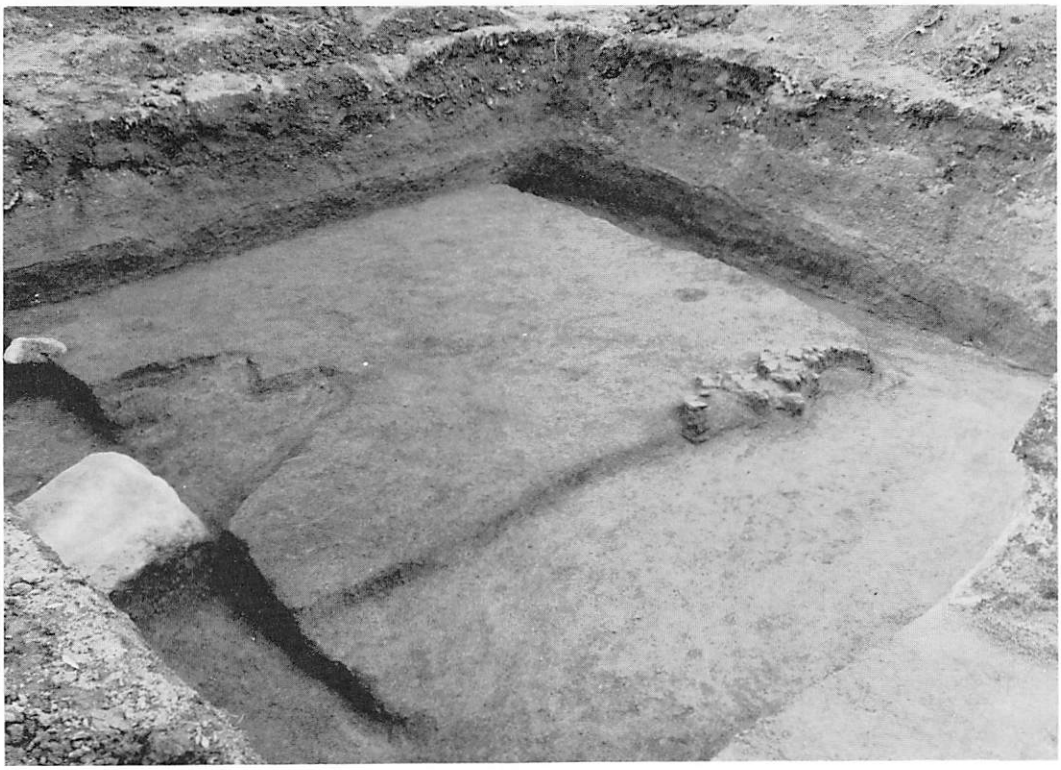
b. 同上近景



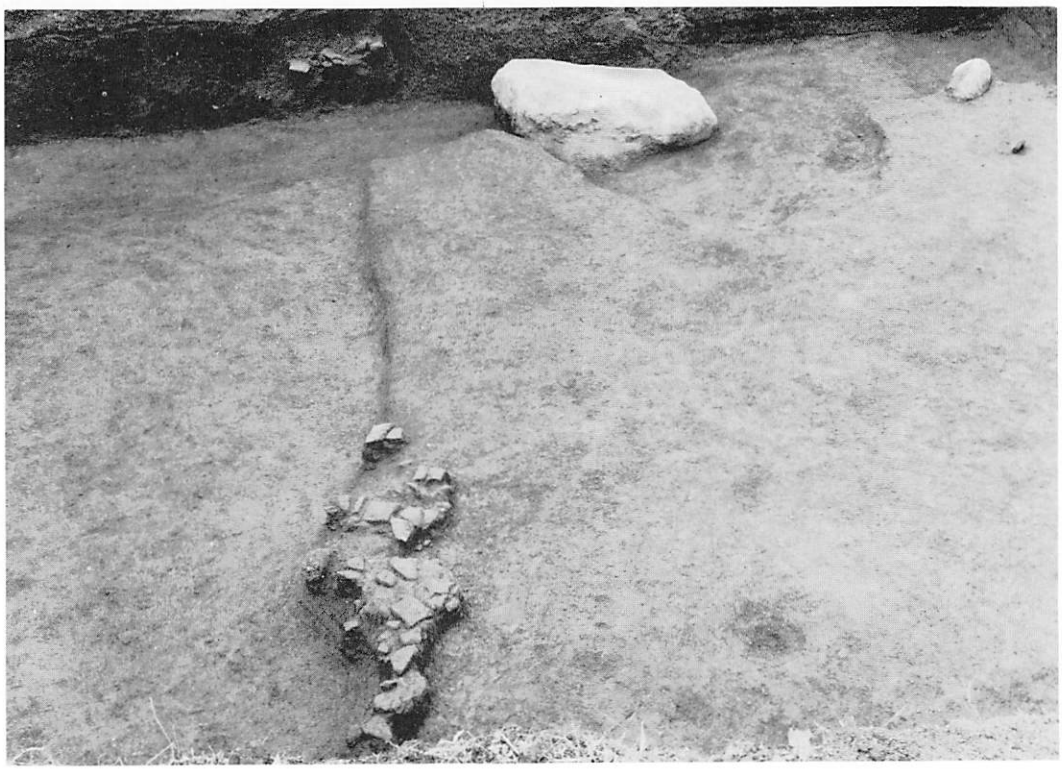
a．建物基壇東辺



b．建物基壇版築



a．建物基壇西辺（北西より）



b．建物基壇西辺（南より）

a．建物基壇南辺(南より)

b．建物基壇南辺(西より)

昭和48年3月印刷

備後国分寺跡第1次発掘調査概報

編集発行　広島県教育委員会

印　　刷　株式会社柳盛社印刷所